

POLE



北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
2021.1.5



第34回

ポーランド国立民族合唱舞踊団

定例総会 & シロンスク *Slask*

Zespół Śląsk オンライン公演『Exodus/エクソドゥス』動画鑑賞会

札幌エルプラザ 4F 大研修室、2020年11月21日(土)

感染急拡大のなか、総会には会員 12 人、動画鑑賞会には約 30 人(うち札幌フォークダンスクラブ7人)が参加しました。

動画鑑賞会の第1部(「シロンスク」より)では、安藤厚本会会長、ズビグニェフ・チェルニャク・シロンスク舞踊団団長(動画)の挨拶、ラファウ・ジェプカ新事務局長によるスライドトーク「ポーランドの文化と社会」(動画)のあと、現代舞踊『エクソドゥス』と民族舞踊ワークショップを鑑賞しました。

第2部(札幌より)では、ラファウ・ジェプカ(動画)、村田譲、遠藤郁子(代読:熊谷敬子)、長屋のり子(同、舞踊:若松由紀枝)、霜田千代磨副会長のみなさんの感想や応援パフォーマンスが披露されました。



ポーランド国立民族合唱舞踊団「シロンスク」オンライン公演
第2部『エクソドゥス』に就いて～スペシャルメッセージ～(感想)

一在外ポーランド人から

ラファウ・ジェプカ



こんにちは、ジェプカ・ラファウです。

「シロンスク」によるスペクタクル“Exodus”を拝見して、小学校から踊りと劇を習っていた私にとっては、たいへん感動的なパフォーマンスでした。

しかし踊りも素晴らしかったけれど、表現されたストーリーにいちばん感動しました。“Exodus”という単語は、たくさんの人が「逃げる」という意味ですが、私が国を離れた理由は(私は札幌に20年超住んでいます)、「逃げる」というよりは、知らないことをもっと知りたいための旅でした。私の旅がこの踊りで表現されたと感じました。

母国を離れることは、どんな理由があっても、さまざまな辛さにつながっています。みなさん「スーツケース」のシーンを覚えていますか。ポーランド語には「スーツケースの上に座るような生活…」という

表現があって、どんなに面白いことがあっても、世界に自分が住む場所がないということはたいへんなことです。「自分の住む場所」とは、物理的な意味でなく、人とのつながりを表しています。

いま実家から1万キロ離れていて、一緒に輪になって踊る人がいるか、いないかで、人生がだいぶ変わってきます。札幌に住むポーランド人は少ないですが、日本にいるポーランド人に会うと、よく「この国は私たちの住む国ではない」と聞きます。しかし、たくさんの日本人と知り合うことが「Exodus」を「生活」に変える道だと私は思っています。

「シロンスク」の舞踊には、世界に散らばっているポーランド人の気持ちを、世界に知らせる力があると思います。ポーランドに住むポーランド人の数は4千万人近くですが、ポーランドの外に住むポーラ

ンド人は2千万人を超えています。世界のさまざまな国にいるポーランド人は、それぞれの場所で現地の人々とコミュニケーションしています。

札幌には、ポーランド文化協会という素晴らしい組織があって、私たちは恵まれていると思います。いろいろなイベントがあって、外国人に温かくしてく

ださっています。現地のみなさんとコミュニケーションを豊かにできて、心から感謝しています。

今日のスペクタクルには、なつかしい国の踊りがありました。「シロンスク」のみなさん、外国にいる私たちの心をすこし明るくしてくださって、ありがとうございました。(Rafał Rzepka, ビデオメッセージ)

感動しました。

遠藤 郁子



「シロンスク」のオンライン公演を鑑賞し深い感銘を受けました。ポーランドの歴史と“Exodus”が重なり、私が 20 歳代の時に過ごしたポーランドでの足かけ5年間の日々、1965 年からの日々を思い出しておりました。

キラル氏の音楽に、同じポーランドの作曲家グレッツキ氏の音楽が重なり(とてもポーランド的なメロディーの反復性)、振付のズプコフ氏が、グレッツキ氏との作品を残された記述を読んで納得いたしました。

←このメロディーには昔聴いたポーランド民謡「マトゥラ・モヤ(私のお母さん)」が重なりました。そしてシベリアのポーランド孤児たちの姿に思いを馳せました。演奏、振付、音楽、照明、カメラワーク、すべてが高い完成度で圧倒され、反復されたメロディーに「ハレルヤ(神の賛美)」が響いた時には、目頭が熱くなっていました。

感動しました。Bravo!! Bravissimo!!! (えんどろ・いくこ、メッセージ)

=写真=上《第2回東京例会》2016.6.23, 下 ポーランド大統領から聖十字功労勲章受勲 2015.2.26

“Exodus” - 100 年前のシベリアからのポーランド孤児救出 村田 譲



箱に小麦粉なのか砂なのか、こぼし落とす女。閉じた蓋のうえに腰を掛け、そこへまた二人が座るが話もせずもたれあうように揺れている。あるいは床にトランクを置き枕にして眠る男という不安定なプロローグ。

タイトルの「エクソドゥス」は旧約聖書の出エジプト。だがモーセがいない。女が足元に置く箱が、モーセの十戒を収めたアーク(聖櫃)なのだろうか、それが失われたということか? 残った者たちの踊りの影は異様に大きく、倒れ起きあがる姿は天を求めるようだ。

「エクソドゥス」には、大勢の人の移動との意味もある。振付師ミハウ・ズプコフ氏は 1920 年のシベリアからポーランドの孤児を日本赤十字が救済した話から着想を得たという。

当時のポーランドでは実効支配するロシアへの反乱が頻発していた。政治犯とされての流刑、あるいは第一次大戦による流民となり 15 万から 20 万人がシベリアにいた。作品冒頭のトランクの男は捕まった政治犯、もたれ合う男女は流民の家族なのだろう。

さて、1917 年ロシア革命での内戦が飛び火しシベリアでは多数の凍死、病死、餓死者が出ていた。脱出を図った 600 人のポーランド人の婦女子を乗

せた列車が燃料不足で立ち往生し、全員が凍死という悲惨な事件も起きる。

見かねたウラジオストク在住のポーランド人たちが「救済委員会」を立ち上げ、ロシア革命政府を警戒してシベリア出兵していたアメリカ、イギリス、フランス、イタリアの各国に働きかけるが、革命軍を止めようがないと分かり撤退する。その時点で駐留していたのは日本だけであり、代表は 1920(大正9)年外務省を訪れる。「罪のない子どもだけでも救ってほしい」との嘆願に、来日して 17 日後に日本政府は救出を決断する。

救援活動の中心は日本赤十字が担い、出兵中の陸軍が支援する。要請された月から翌年にかけて計5回で 375 名。2回目の要請の 1922 年は、日本もシベリア撤退が決定しており急を要しながら3度に分け 390 人をそれぞれ迎え入れた。年長で 16 歳、年少者は1歳。靴もない子が多く大半が栄養失調であった。

このことが報道されると、子ども好きの国民性なのか、寄付が続々と集まった。ポーランドへの帰国の船が用意されたが、親を失っていたときに優しく接してくれた看護師らと別れがたい子どもが続出し「アリガト」を繰り返しながら「君が代」を歌って別れを告げた。独立を回復していたポーランドへと帰国

した子どもらは、感謝を忘れないために「極東青年会」を設立し、日ポ友好に尽くしている。

今回の作品では、どの時点までをモチーフにしたのかは分からないが、後半場面ではハレルヤ唱が響き渡る。

日本赤十字の NEWS オンライン版 2020 年2月号には“恩返し”と題し、1995 年「阪神淡路大震災」

新刊紹介

『迷子の魂』 オルガ・トカルチュク(文)、ヨアンナ・コンセホ(絵)、小椋彩(訳)

岩波書店
2020.11

フィロソフィー本?

私がもし図書館司書なら、大型書店の店員なら、この本は哲学書のカテゴリーに分類するだろう。いや、アート表現のコーナーか。でも思春期のころにこそ触れてほしい。大人のための絵本コーナーも充実しているから、出来れば表紙飾りの棚が相応しいかと、あれこれ悩むだろう。

まずは表紙をご覧ください。インクの滲みボケる題字は時の流れが重なり、背表紙の擦れ具合のデザインも心憎い。

所々には、時の移りを醸し出すような、不用意に紛れこんだ手ちぎりの挟みのメモや、縁が朽ちか

けた古写真の仕掛け。数枚透明シートの読みページと、絵のみの次ページへの透視の時空間。

とびとびのスタンプページの数字が、待つことを伝え、時を急がせない、母なる製作者の慈しみが奥に潜んで早る指を留めさせるのだ。

このご本一冊に、前半はペン先で葉脈一本も略さない具象力の高い俯瞰のモノトーン。後半は次第に増える差し色と懐かしい画剤の香り立つタッチのボリューム。

素朴で漂白しない昔ながらの“帳面”の方眼紙素材は、逆に贅を尽くすアート性を高め、その全ての構成のコンテンツが、魂のあり方にベクトルを向け、ノスタルジーの翳りあるセピア調の熟成で滲み染めている。

まずはその初見で、現代の過剰世界から覚醒しながらの感動をお伝えしたいという衝動があった。

これでようやく本の内部に潜入出来る。筆者は2018 年度ノーベル文学賞受賞のポーランド作家オルガ・トカルチュク、絵のヨアンナ・コンセホは出版(2017)の翌年、本書でポーニャ・ラガツィ賞優秀賞を受賞、翻訳の東洋大助教でポーランド・ロ



の被災児童 60 人がポーランドに招待されたときの記事が掲載されている。まさに友好ということは手を指し伸ばすことから生まれるということであろう。

(むらた・じょう)

参照(いずれも web から)

- ・「Vol.10 ポーランド孤児救済」日本赤十字社、展示紹介コラム、2011/7/1
- ・「100 年前のシベリアからの救出劇! 765 人のポーランド孤児と日本人の奇跡の物語」辻明人、日本文化の入口マガジン和楽 web、2020/5/21

シア文学専門の小椋彩(ひかる)さんは、昨年北大での公開講座にて、学識を超えたトカルチュクとの交流もレポートされていたので、嬉しさも増す。

【魂が動くスピードは身体よりもずっと遅いのです。あるところに、忙しすぎて魂をなくしてしまった男がいた。男は医師の助言にしたがひ、「迷子の魂」をじっと待つことにする。すると——】

帯にはこう、あらすじが記されていて、私はすぐさまミハエル・エンデの名作「モモ」の時間どろぼうと盗まれた時間を人間に返した不思議な女の子モモを連想したが、本作は淡白なストーリーで他力を登場させない。仮想であるが現実味が色濃い。

アドバイザーは賢い老医師一人。主人公は自分の魂を置き忘れ、自分の名さえ忘れた、一昔前ならモーレツサラリーマンと言われた類いだろうか。現代なら同調時代という個の喪失・埋没の知らぬぶり傍観社会への警告とも受け取れる。

前向き、自分探し、ポジティブ、アイデンティティへの希求は、より過剰な社会の加速で逆に排他を生み出しているのかもしれない。

主人公ヤンはひたすら待つのだ。数ページの沈黙は待つことに注がれている。そして迷子の魂は時を合わせて空洞の主の前に現れる。

待つとは、留まるとは。皮肉なことに、これはコロナウイルス蔓延で余儀なくされた私達自身の暮らしでもある。トカルチュクは予言者でもあったらしい。

自分とは、果てしない旅をしてきた DNA の産物である。この恵みを魂の有り様と重ねれば、もう感謝しかないはずなのに、私達は足りないものをまだ追いかけていた。

そろそろ気づいて良いはずである。

魂と歩調を合わせよう。

自分を訪ね、自分に還る、魂そのものを迎える。

現象に一々反応して焦り、悪者を探すのはよそう。魂は迷子となっても、必ずや主の元に着く。

自分を見失うとはよく言ったものだ。